

# 考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合う力を育てる社会科の研究

## 一言語力育成を重視した指導法の開発―

高知市立昭和小学校 教諭 北岡 愛

「伝え合う力」を育てるためには、「言語力」を高めることが重要である。本研究では、言語力とは、言語力育成会議の定義に基づき「考える力」を中核におき、言語を活用しながら「表現する力」、「判断する力」とした。小学校社会科においては、資料の読解、調べ学習、意見の交流などの学習活動が展開され、どの学習過程においても読解力や言語力が必要とされる。そこで、「伝え合う力」を形成するためにはどのような支援を行えば「言語力」が高まるのか、その指導法の開発に努めた。具体的には、社会科の学習を中心として、「社会事象から自分の考えをもつ力の育成」、「自分の考えを表現する力の育成」の2点について授業改善に取り組む、言語力の向上が見られたかを検証した。

キーワード：伝え合う力、言語力、思考力、表現力、判断力

### 1 はじめに

これまでかかわった子どもたちのなかには、根拠をもちながらも自分なりの考えや思いをまとめ、それを伝え合うことが苦手な傾向が見られた。そのため、活発な意見の交流から自分の考えを再考させる授業がなかなか展開できなかった。そこで、7月にA小学校の5年生に対して「社会科」と「話し合い」に関する調査を行ったところ、「自分の考えを話すことは苦手である、好きではない」という結果が現れた。その主な理由としては、「話し合う時に自分の考えが見つからないから」、「どのように話したらよいかわからないから」といった2つのことが挙げられた。

平成15年度実施のOECD「生徒の学習到達度調査」(PIISA調査)<sup>1)</sup>では、「テキストに基づいて考えた理由を述べる、答えを説明する」といった問題で誤答率や無答率が高いという結果になっている。また、平成19年度及び20年度全国学力・学習状況調査結果<sup>2)</sup>でも、「主として『活用』に関する問題」の通過率が低いことが明らかになっている。つまり、自分の考えを伝えられない傾向は、日本の子どもたちの抱えている課題であると考えられる。

新学習指導要領<sup>3)</sup>においては、「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図るうえでの言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」が重点項目として示された。つまり、子どもたちが自分の考えや思いを伝え合うことができる授業を目指すことが、これからの学校教育で求められており、その実現に向け、基本的な知識だけではなく、社会のなかで人と結び付くための基盤となる言語力を養うことが必要ではないだろうか。

### 2 研究目的

子どもたちは、なぜ、自分の考えを明確にもつことや考えや思いを伝え合うことが苦手なのか。その原因として、自分の考えが明確にもてるような教師の支援が足りないことや、自分の考えや思いをまとめる語彙が乏しいことなどが考えられる。そこで、以下のような仮説を立てた(図1参照)。

教材(資料)や発問を精選・工夫することにより、児童は思考をゆさぶられ、自分の考えを明確にもつことができるのではないか。また、言葉を意識しながら考えたことを伝える活動を重視することにより、言語力もはぐくまれるのではないか。

この仮説をもとに、次の2点について授業改善に取り組んだ。①社会事象から自分の考えをもつ力の育成、②自分の考えを表現する力の育成である。これらを通して、自分の考えを明確にもたせ、書

く力を伸ばすことにより、言語力を育成することができたか検証した。

### 3 研究内容

#### (1) 理論研究

##### ア 言語力の定義

2007年8月16日、言語力育成会議のなかで「言語力」の定義を「知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために、言語を運用する（考える、話す、聞く、書く、読む）のに必要な能力を意味する。」と述べている。また、甲斐<sup>5)</sup>は、「言語力とは、何らかの問題を見だし、それを解決していく力のことであり、言語で考える部分に必要とされる力である。」と述べている。これらを踏まえ本研究では、自分の言葉で考えたことを適切に書いたり話したりする能力を「言語力」ととらえた(図2)。

##### イ 社会科における「言語力」とは

小学校社会科においては、主に資料の読み取り、調べ学習、話し合いなどの過程を通して授業が展開される。そして、どの過程においても、読解力や言語力が必要となるため、読解力や言語力は、社会科の学習においても伸ばすことができると思われる。また、本研究テーマでも挙げたような「考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合う社会科」の授業を行うためには、児童に資料や文章の読み取りから自分が調べたい・考えたい課題を明確にもたせ、調べたこと、考えたことを自分の言葉で適切に表現する「言語力」が必要である。社会科で育成する「言語力」とは、読み取った社会事象に対して根拠を示して推測したり、自分なりの解釈を加えて論述したり、伝え合ったりするなどの学習活動を充実することで、社会事象に対して自分自身の価値判断や社会的な価値判断を言葉で表現できることととらえた。

#### (2) 実態調査（社会科と話し合いに関するアンケート）

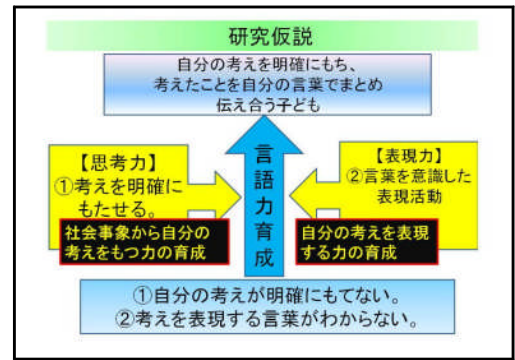
##### ア 目的

社会科の学習にどのような意欲をもって取り組んでいるのかを把握する。更に、伝え合うことができている児童とそうでない児童を調査するなかで伝え合うことができない原因を探り、伝え合う力を育てるための授業改善に生かすことを調査の目的とした。

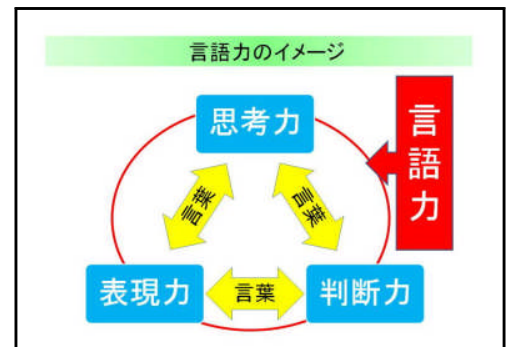
##### イ 結果

社会科の授業に対して、「好きだ」、「大切だ」、「なるほどと思う」などの項目は肯定的にとらえている児童が多かったことに対して、「考えをもつことができる」と答えた児童は約5割、「話すことができる」と答えた児童は約4割という結果が現れた。学習に対して前向きに取り組んでいても、自分の考えを伝えることは苦手であるという実態が明らかとなった。

「話し合いをすることは必要だ、学ぶことは多い」など、話し合いのなかで自分の考えを伝えることの重要性は認識しているものの、「考えを伝えることは好きではない」と答えた児童は約6割いた。話すことが苦手である主な理由としては、「どのように話したらよいかわからないから」、「自分の考えに自信がないから」などが挙げられていた。話し方がわからない、考えに自信がない児童に必要な手立ては、自分の考えを明確にもたせることにあるという研究の裏付けとなった。



(図1) 研究仮説イメージ図



(図2) 「言語力」図式化

### (3) 「伝え合う力」を高めるための授業づくりの在り方

伝え合う力の要素は様々なものがあると考えられる。その基盤にあたるものは、望ましい人間関係や自尊感情、学習への関心・意欲などであり、これは学級活動や道徳などを含めた全ての教育活動で培われる。その基盤のうえに聞く、話す、書くといった伝え合うための基礎・基本があり、それは国語科を中心に培われ、全ての教科を通して高められると考える。そこで、本研究では、社会科の学習のなかで伝え合う力を育てるために言語力育成の指導法を開発する研究を行った。

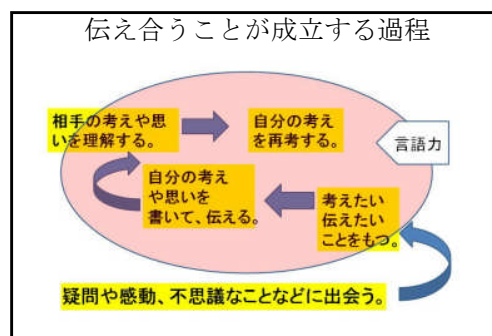
茨城県笠間市立笠間中学校<sup>6)</sup>は、コミュニケーション成立過程を7段階にわけ、それぞれに段階に応じた支援を考えていた。これを参考に伝え合う力の成立する過程を次のようにまとめた。

社会科の学習では、まず、資料やグラフを通して社会事象に出会う。その社会事象から、「なぜ? どうして?」といった疑問や「すばらしいな。びっくりした。」といった感動をもつことにより、「伝えたいな」という気持ちが生まれる。これが、伝え合う力の成立する過程の入り口にあたる。

そして、自分は何を考えているのか、何を伝えたいのかを子ども自身に明確にもたせ、その考えたことや伝えたいと思ったことを書かせる。

この「書く」という活動は、自分が何を伝えたいのか視覚的に明確にするために重要な活動である。岡本<sup>7)</sup>は過去の心理学者の考え方をもとに、「幼児期から児童期にかけてのことばの展開」として次のように考えた。「児童期は話しことばと書きことばが含まれる『二次的ことば』が展開される時期である。そのことばは、話しことばを書きことばに変化させることにより、『二次的ことば』としての話しことばと書きことばが重層的に展開していく。」このことから、「書く」ことは、自分の考えの曖昧な部分を整理するために重要であり、また、伝えるために「整理して書く」ことは、伝え合う力を成立する過程のうえでも必要なことであるととらえ、「書く」ことを重視することとした。

そして、考えや思いを伝える過程に進む。「伝え合う」とは、「伝える」ことを相互方向に行うものであり、一方的に「伝える」のではない。そこで、「伝え合う」ためには、「考えをただ伝える」、「わかりやすく伝える」、「友だちの考えを聞いたうえで更に伝える」といった段階を踏むことが必要であると考えた。また、「伝え合う」ためには、「考えをただ伝える」段階で、相手が聞いても分かるように教師が言葉を添える、「友だちの考えを聞いたうえで更に伝える」段階で、個々の意見を教師がつなげる等の支援を行うことが重要である。そうすることは、全ての段階において言葉を使って思考し、表現し、判断していることになり「言語力」につながる。このことから、「言語力」を育成することが、「伝え合う力」を育てることにつながる考えた(図3)。



(図3) 伝え合うことの図式化

## 4 実践研究

### (1) 検証授業の概要

ア 授業単元 「工業の今と未来」(教育出版・第5学年)

### (2) 授業改善の視点

ア 社会事象から自分の考えをもつ力の育成

社会科では、統計グラフや写真などの資料から社会事象を読み取り、社会事象の意味や働きを多面的に考え公正に判断できるようにするとともに、児童一人一人に社会的な見方や考え方が次第に養われるようにすることが求められている。そのためは、まず、読み取った社会事象から自分の考えをもたせることが重要である。そこで、教材(資料)や発問を精選・工夫することで学習意欲を高めさせ、自分の考えを明確にもたせることができるように留意した。

## イ 自分の考えを表現する力の育成

自分の考えをもったり考えたことを話したりすることが苦手な児童が多いという背景があることが明らかとなった。そこで、「言語力」の育成に視点をあてた授業に取り組むために、言葉を意識し考えたことを表現する活動を仕組んだ。

### (3) 検証内容

#### ア 「社会事象から自分の考えをもつ力の育成」についての検証内容

授業の導入において、資料（提示の仕方も含む）や発問を精選・工夫することによって児童の課題意識を醸成し、自分の考えをもつための意欲を喚起することができたか検証する。

#### イ 「自分の考えを表現する力の育成」についての検証内容

伝え合うことが苦手な児童の実態を把握し、言語力を高める指導（手立て）を行い、言語力の向上が見られたか検証する。

### (4) 検証授業内容及び検証結果と考察

#### ア 社会事象から自分の考えをもつ力の育成

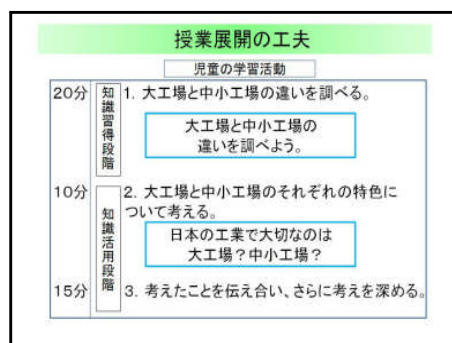
##### (ア) 自分の考えが明確にもてる教材（資料）の在り方

教材（資料）は、児童にとって身近なものや資料を複数提示し比較することで思考が生まれるものを提示した。また、教科書の内容やグラフで押さえないポイントが写真から読み取れるもの、更に、資料から「えー」といった驚きや「へー」といった不思議さ、「ほー」といった感動が言葉となって表れるようなものを意識して取り入れた。

##### (イ) 授業展開と発問の工夫

1時間の授業の流れを習得と活用の2段階にわけた(図4)。前半の約20分は、資料等を活用しながら社会科で必要な知識を習得する段階、後半は考え、話し合う活動を通して前半に学んだ知識を活用する段階とした。この授業展開であれば、調べるところ・学ぶところ・考えるところ等が整理され、自分の考えを明確にもちやすいのではないかと考え、取り組むこととした。

発問では、主に2種類の発問を取り入れた。大西<sup>8)</sup>は、授業において教師がしゃべる言葉を3つに分類している。



(図4) 習得から活用の授業展開

「発問」、「説明」、「指示」である。「『発問』は、問いを発すること。『説明』は、説き明かすこと。『指示』は、指し示すこと。そして、『発問』は、子どもの思考にはたらきかけ、『指示』は、行動にはたらきかけるものである」と述べている。これを踏まえ、今回の研究では、「発問」は、問題提示をする際に思考を促すものとしてとらえ、どのような発問であれば児童の考えを明確にもたせることができるかを研究することとした。

今回は、子どもの思考に沿った発問とこれまでの学習をもとに意志決定を促す発問の2種類を取り入れた。第2時の主要発問（学習課題）「どうしてこの鋳鋼所にしか仕事を頼まないのだろう。」は、児童の疑問から生まれた児童の思考に沿った発問である。第4時「日本の工業で大切なのは大工場？中小工場？」、第6時「高知県に工業地域をつくることに賛成？反対？」、第7時「自分の考える日本の工業のナンバーワンは？」は、これまでの学習をもとに意志決定を促す発問（学習課題）である。

##### (ウ) 検証結果及び考察

工業という高知の児童にとってはあまり身近でない教材であったが、校区の中小工場を切り口に単元を構成したことは、高知の良さを再認識したり学習意欲を喚起したりすることにつながった。児童の感想には、「資料やグラフがわかりやすかったから授業の内容がよくわかった。」

という感想が複数あったことから、今回児童の心を動かす資料を精選したことは、資料から児童の学習意欲を喚起することにつながったと考えられる。安野<sup>9)</sup>は、「課題意識を醸成するための教師の役割は、意外性のある事実や矛盾する事実に出会わせたり、人間の営みや知恵のすばらしさを感じさせたりすることである。」と述べている。今回、学習課題として地域のすばらしさを感じる教材（資料）、意志決定により自分の立場がはっきりされる学習課題を精選したことで、学習への追求意識を喚起し、課題意識を醸成することができたのではないかと考えられる。

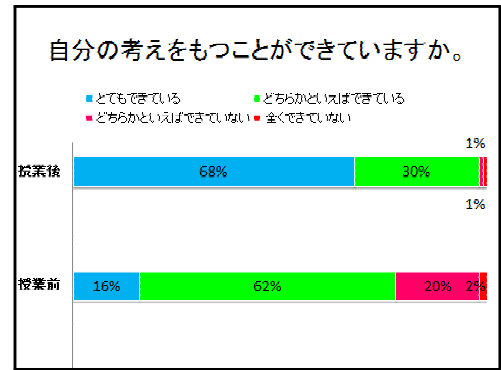
「自分の考えをもつことができたか」について検証前後にとった意識調査より検証した（図5）。t検定の結果、1%水準で有意な差があることがわかった。自分の考えをもつために有効な支援の割合は、「考える時間が確保されていたから」といった「時間配分」や「課題がわかりやすかった」といった「学習課題」の良さについて回答している児童が多かったことが明らかとなった。このことから、自分の考えをもたせる支援として、「習得から活用へ」の授業展開は、考えを明確にもたせるためには効果的であり、「発問（学習課題）」は、児童の思考に即したものと意志決定を促すといった児童にとってわかりやすい課題であれば、自分の考えを明確にもたせることができる傾向にあるということが示された。

図7は、「考えをもつこと」と「考えを書くこと」の相関を検証前後にとった意識調査より検証した。t検定の結果、両軸とも1%水準で有意な差があることがわかった。「考えを書くことができる児童は、考えをもつこともできる」という相関が現れていることから、自分の考えを書くためには、考えを明確にもたせることがやはり必要であると考えられる。

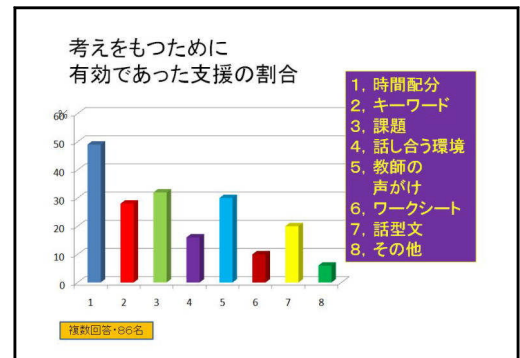
#### イ 自分の考えを表現する力の育成

##### (ア) 板書におけるキーワード化

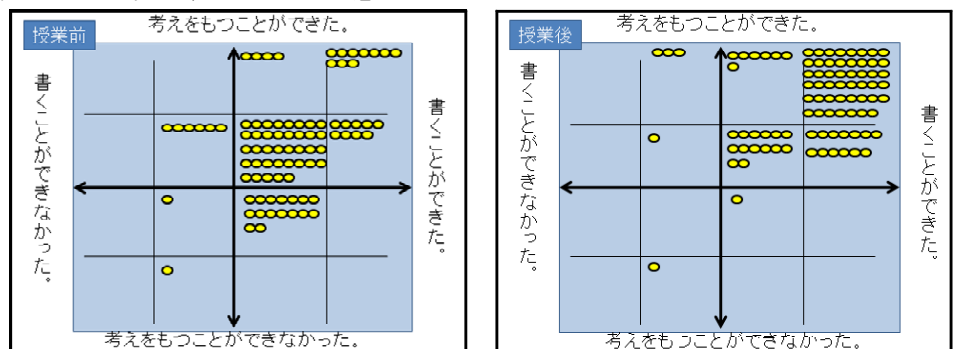
板書は知識として覚えるところや児童の意見等が入り交じっていることが多い。そこで、前半の知識習得段階で学んだことや授業の要点をキーワードにしながらか板書にまとめた（図8）。



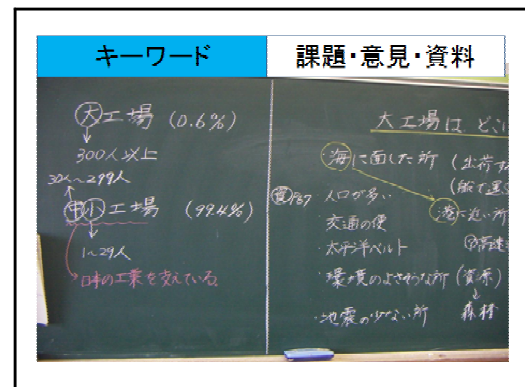
(図5) 意識調査の変容



(図6) 支援の有効性



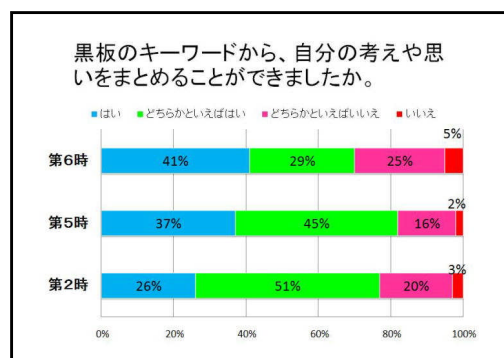
(図7) 考えをもつこと考えを書くことの相関性



(図8) 板書の活用例

#### (イ) 板書におけるキーワード方式の検証結果と考察

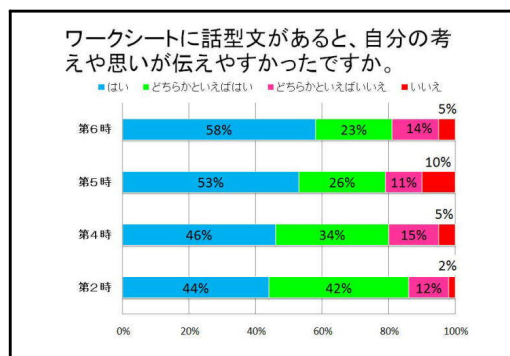
毎時間の振り返りカードでは、80%前後の児童がキーワードを使って、「自分の考えや思いをまとめることができた」と答えている(図9)。「ワークシートでポイントとなる言葉を書くところ、自分の考えを書くところで分けられていて、自分で後でワークシートを見たらすごくわかりやすかった」といった感想も見られた。このことから、児童は自分の考えを書く段階よりも学んだことを後で振り返る段階にこのキーワードを活用していることがうかがえた。



(図9) 振り返りカードの集計

#### (ウ) 話型文を取り入れたワークシート方式

ワークシートには、キーワード、考え、根拠、授業後の感想、この4つが記述できるように作成した。根拠を書く部分では「どこでそう思ったか」という話型文を活用した。佐藤<sup>10)</sup>は、『どこでそう思ったの』と尋ねるからこそ、テキストとのつながりや子ども同士のつながりが生まれる」と述べている。このことから、「どこでそう思ったか」という話型文は、自分の考えや根拠を教科書や学習経験とつなげることができると考え取り入れた。



(図10) 振り返りカードの集計

#### (エ) 話型文を取り入れたワークシート方式の検証結果と考察

話型文の有効性を80%の児童が肯定的にとらえている(図10)。また、時間がたつにつれて「はい」と答えた児童が大幅に増えている。また、授業後の感想には、「プリントの話ははじめと終わりの文章があったので、私は発表が少しはできたと思います。」という言葉もあった。このことから、話型文をあらかじめワークシートに記入しておくことは、考えを整理して書くという支援としては有効であると考えられる。

授業のなかでは、話型文を活用しながら「～です。どこでそう思ったかという、教科書の～ページに～と書いてあるからです。」「どこでそう思ったかという、この間の学習で～だったから～だと思いました。」といった文章が見られた。分析すると、「どこでそう思ったかという」の話型文の後に、根拠となる部分を主に3つの部分から見つけ出している傾向が見られた。一つ目は教科書や資料集から、二つ目は自分の学習経験から、三つ目はその2つをあわせたものからである。話型文があることにより、児童は、根拠となる部分を自然に言葉を添えて書くことができた。また、様々な角度から自分なりの根拠を探すため、その児童にしか考えられない言葉にこだわった理由を書く傾向が見られた。このことから、「どこでそう思ったか」という話型文は、しっかり根拠をもって書かせるために効果があると考えられる。

## 5 成果と課題

### (1) 社会事象から自分の考えをもつ力の育成

#### ア 成果

地域の良さを感じることができる教材、意志決定により自分の立場をはっきりさせる発問(学習課題)を精選・工夫したことにより、課題意識を醸成し自分の考えを明確にもたせることができた。また、一時間の授業の流れを、前半は資料から社会事象を理解する時間、後半は社会事象の意味を考える時間に分けた。このことにより、一つの課題に対してじっくりと考えることができ、自分の考えを整理することができた。

## イ 課題

意志決定を取り入れた発問（学習課題）は、自分の立場をはっきりとさせ意見交換がしやすい発問ではあるが、児童の思考の流れに沿わない場合がある。意志決定を取り入れた発問（学習課題）を設定する際には、思考の流れが途切れないような資料を工夫することが必要である。また、今回の検証授業では、複数の資料から課題意識を醸成させることに取り組んだが、資料が多岐に及んでいたため、学習内容が理解しづらい児童もいた。全ての児童に確実に理解させるためには、資料は多くても2～3枚程度に精選し、資料や学習課題を見たときに「えー」、「へー」、「ほー」といった驚きや感動の言葉が児童の声となって現れる授業展開が望ましい。

## (2) 自分の考えを表現する力の育成

### ア 成果

書くことができるための支援として、「キーワード」と「話型文」を活用した結果、「自分の根拠を明確にする」、「学習内容を整理する」、「伝えたいことを根拠を示しながらまとめる」といった場面においては有効であった。約93%の児童は、「どちらかといえばできた」も含め、「考えを書くことも考えをもつこともできた」と答えている(図7)ことから、今回取り組んだ言語力を育てるための支援は有効であったと思われる。

## イ 課題

「キーワード」は、社会科用語を整理し、学習内容をまとめることにおいては有効であるが、キーワードを活用しながら自分の考えをまとめ整理することまで活用させることができなかつた。今後、「キーワード」を授業のなかで位置付けるように取り組みたい。

「話型文」は、伝える段階においては有効であったが、「伝え合う」段階では活用できていなかった。「伝え合う力」を育成するためには、言語活動を充実させる指導法、学級経営の在り方などを含め更なる支援が必要である。

## 6 終わりに

「伝え合うために自分の考えを明確にもつこと」、「伝えるために言語力をはぐくむこと」は、「社会事象から自分の考えをもつ力の育成」、「自分の考えを表現する力の育成」を目指した授業改善によって一定の成果を上げることができた。そして、検証授業で明らかとなった点は以下のことである。

### (1) 「伝え合う力」が育っていく児童の姿

「伝え合う授業」といえば、活発に児童が自分の考えを伝えている授業がイメージされやすいが自分自身はそのように考えてはいない。なぜならば、個々の児童によって伝え合うことができる段階に違いがあるためである。そこで、「伝え合うこと」が成立する過程のなかで、どの段階でどの力を付けておくことが「伝え合う力」を育成することにつながるのか明確にしておくことが必要であると考え、「伝え合う力」はどのような過程で育っていくのかを、5つの段階に分けた(表1)。

表1 「伝え合う力」が育っていく児童の姿

段階	「伝え合うこと」が成立する過程	段階	「伝え合う力」が育っていく児童の姿
I	疑問や感動、不思議なことに出会う。	I	気付いたことを話すことができる。
II	なぜ、どうしてでだろうと考え、伝えたいことをもつ。		自分の考えや思いを明確にもつことができる。
III	自分の考えや思いを表現する。 (まず自分の考えや思いを書く。→書いたことを伝える。)	II	自分の考えや思いを書くことができる。
		III	自分の考えや思いに根拠を示すことができる。
		IV	自分の考えや思いを根拠を示しながら伝えることができる。
IV	意見の交流によって、相手の考えや思いを理解する。	V	友だちの考えを聞いたうえで、自分の考えや思いを伝えることができる。 再考したことを、自分の言葉でまとめることができる。
V	自分の考えを再考し、まとめる。		

(2) 「言語力」を高めるための支援の在り方

「伝え合う力」を育てるためには、「言語力」を高めることが求められる。「言語力」を高めるためには、「言語力」を高めるような支援を意図的に取り入れる必要がある。そこで、「言語力」を高めるためにはどのような支援が必要か考え、以下のようにまとめた（表2）。

表2 「言語力」を高めるための支援

段階	「伝え合う力」が育っていく児童の姿	「言語力」を高めるための支援
I	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気付いたことを話すことができる。</li> <li>・自分の考えや思いを明確にもつことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教材の開発</li> <li>○疑問や感動が生まれる資料やその提示の工夫</li> <li>○課題が明確にされる発問の工夫（意志決定を促すものなど）</li> </ul>
II	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えや思いを書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○社会科用語のキーワード化</li> <li>○辞書・教科書・資料集・地図帳の活用</li> <li>○書くことについての知識・技能の定着を図る指導法の開発</li> </ul>
III	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えや思いに根拠を示すことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○根拠を示した話型文の活用</li> </ul>
IV	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えや思いを根拠を示しながら伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童の発言をつなぐ教師の意図的な発言</li> <li>○意図的な教師の指名</li> <li>○根拠を示しながら話す話し方の指導</li> </ul>
V	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの考えを聞いたうえで、自分の考えや思いを伝えることができる。</li> <li>・再考したことを自分の言葉でまとめることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ウェビングなどの、キーワード化されたまとめ方</li> <li>○新聞形式や模造紙など児童のまとめ方</li> <li>○まとめる段階に有効な話型文の活用</li> </ul>

今回、様々な文献などにあたるなかで、よい授業づくり（授業計画）がよい授業に結び付くことを改めて実感した。また、授業のなかで子どもたちの良さを伸ばし、自己肯定感を高めていくことがよい授業に結び付くことも改めて認識すると共に、学級経営と授業とは車の両輪であると切に感じた。

今後も、教材・発問の精選・工夫を心がけ、言語力育成につながる授業展開を考えると共に、伝え合う力をはぐくむ授業づくりを目指したい。

8 引用及び参考文献

- 1) 文部科学省 「読解力向上に関する資料 P I S A 調査（読解力）の結果分析と改善の方向」東洋館出版社 平成17年
- 2) 文部科学省 「全国学力・学習状況調査結果の概要」2008年
- 3) 文部科学省 「小学校学習指導要領」平成20年3月告示
- 4) 文部科学省 「言語力育成協力者会議配布資料」2007年
- 5) 甲斐睦朗 「国語力を高める」京都橘大学HP 2008年
- 6) 笠間中学校 「伝え合う力を養う調査研究事業中間報告書」2008年
- 7) 岡本夏木編 「児童心理学講座4 認識と思考」金子書房 1969年
- 8) 大西忠治 「発問上達表－授業づくり上達法PART 2－」民衆社 1988年
- 9) 安野功 「社会科授業力向上5つの戦略」東洋館出版社 2006年
- 10) 佐藤学 「教師たちの挑戦」小学館 2003年